

十一月のテーマ

積極的に生きる



え・城谷俊也

# 朗らかな人の心は くもりを照らす光

**以** 前勤めていた会社を退職し、新しく製造業の会社を起こ

したY氏。起業してから数年間は、順調に業績が伸び、会社もどんどん大きくなりました。

ところが、ある年を境に仕事をすればするほど赤字になるという状態が続き、原材料の高騰なども重なって、倒産寸前という状況にまで陥りました。

銀行の融資を受けるために人員整理を行ない、金策に走り、身も心もボロボロの状態で車を運転中（このまま崖の方へハンドルを切れば、保険金で会社を救えるだろうか）と頭をよぎるほど、思いつめるようになっていました。

そうした中、懇意にしていた経営者から「倫理経営講演会」への誘いを受けました。とにかく会社を何とかしたいという気持ちから、専務である妻と講演会に参加したY氏。その中で聞いた「行き詰まる会社の共通点」という話が、自分の会社のことを言われているように胸に突き刺さったのです。

その話の中に、『無理、できな

い』が口癖になっている会社」という項目がありました。まさにY氏の会社でも、「無理だ」「できるわけない」という言葉が日常的に飛び交っていたのです。Y氏自身、経営が苦しくなるにつれ、寝床の中で自問しながら（無理だ、できない）と毎晩のように唱えていました。それを社員がオウム返しのように口にするのは当然だろうと講演を聞いて思ったのです。

「自分の後ろ向きな気持ちが社員に反映していたのではないかと気づいたY氏は、倫理法人会に入会し、毎週「経営者モーニングセミナー」へ参加するようになりました。そこで出会う仲間たちの話を聞いているうちに、（倫理の実践によって勇氣と信念を植え付け、自信を持つとう。何事にも積極的に行動できる人間になろう）と決意をするに至ったのです。

それからは、社内で率先して元気な挨拶をするようになったY氏。社内での会議では「無理だ、できない」を禁句としました。代わりに、毎朝の朝礼で「やります。できま

す。頑張ります」と唱和するようになりました。

最初はぎこちなかったのが、毎日朝礼で唱和していると、社内の雰囲気は次第に明るく変わってきました。また、会議に臨む際の気持ちも前向きになって、建設的な意見が交わされるようになってきたのです。やがて業績も回復に向かい、あれほど思いつめていたことが嘘のような明るさが社内に戻ってきたのです。

\*

企業とは人の集合体です。そこで働く人によって、社風が作られていきます。最も大きく影響するのは、経営者の姿勢です。

困難の中にあっても、企業のトップが明るく、朗らかに仕事に向かうところに、前途は開かれるものです。明朗になるには、Y氏のように形や言葉から入るのも良いでしょう。『万人幸福の葉』の一節、「朗らかな人の心は、世のくもりを照らす光である」（61頁）とは、まさに経営者のためにあるような言葉ではないでしょうか。